学校名	千葉県立野田中央高等学校

校 長 名：谷澤　義光

所 在 地：千葉県野田市谷津７１３

電話番号：04-7125-4108

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	芸術（美術）

【研究成果のポイント】

自分の価値意識で作品を選び，作品の歴史的位置付けや作者の考えなどを主体的に調べることにより，関心度を高め作品の見方や感じ取る力を深める学習に成果があった。

作品の歴史的存在理由を推測したり，美術文化に関わる仮説を立てたりすることで，思考力が養われ，日本と諸外国の類似点を指摘するなど鑑賞する能力が高まる成果があった。

言語活動を充実させることで，他者の多くの考えを取り入れながら作品をみることができ，新しい自分の価値意識がつくりだされ鑑賞する能力が高まる成果があった。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

本校は，千葉県の北西部に位置する野田市にある普通高校であり，地元中学校からの進学者が約６割を占める地域に根ざした学校である。行事に対する生徒の意欲は非常に高く，明るい学校生活を送っている。野田市のほぼ中心に位置するため，校名のとおり，進学・就職ともに野田市の中心として活躍する学校を目指している。

２　学校の概要

課程	学科	１年		２年		３年		計	
		学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全日制	普通科	6	242	6	240	6	223	18	705

教員数 51 名（１名）

芸術は音楽，美術，工芸，書道のⅠ，Ⅱ，Ⅲを設定しており，１，２年では，生徒の希望により全員がいずれかの科目を継続履修し，３年では選択科目に設定している。

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

（1）研究主題

鑑賞「美術文化についての理解を深める」指導方法の研究

（2）研究主題設定の理由

「美術Ⅰ」の目標では，「美術文化についての理解を深める」ことを新たに加え学習指導要領の改善を図っている。高校生にとって美術作品の鑑賞は，表現活動と同等に美的体験を深めるものとして，その充実が求められている。生徒が興味をもち，心を豊かにする美術文化の鑑賞学習として，美術史の流れを推理し，調査や仮説を発表する中で言語活動を生かして鑑賞の能力を伸ばす題材化を試みた。

（3）取組体制

校内に教頭，教務主任等からなる「研究指定委員会」を設置し，校長の指導のもと，今回の研究指定に対して計画的に，全校で取り組むことができる体制を構築している。

（4）２年間の主な取組

平成21年度	興味関心のある作品を組み合わせて美術史年表を作成し，調査発表する学習により「美術文化の理解」を深める題材化を試みた。
平成22年度	作品の制作年代や地域を推理し美術史年表を作成，「歴史上の存在理由」を調査したり仮説を立てたりする学習により鑑賞の能力を伸ばし，「美術文化の理解」を深める題材化を試みた。

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1)　研究の重点

鑑賞「美術文化についての理解を深める」

指導方法の研究

①　調べる力を育成する

②　考える力を育成する

（予測させる，仮説を立てさせる）

③　言語活動を活用する

(2) 具体的な取組

①　作品の調査

ア　関心を高め，調べ方を学ぶ

（全体と個人の活動　２ｈ）

教科書の作品を取り上げ作品名，表現手法，作品サイズ，制作年代，作者名，作者の国籍，当時の日本や中国の時代名，西洋美術の様式名称をノートにまとめ，作品のよさや美しさを批評し合い幅広い見方を獲得させる。その際，作品に対する自分の考えを大切にするとともに，他者の異なる感じ方や考え方を尊重させる。

教科書より興味関心ある作品を取り上げ，作品からよさや美しさを感じ取らせノートにまとめ，転写スケッチをする。スケッチは，他者の立場に立って伝えたい情報を分かりやすく描くプレゼンテーションとしての絵を心掛けさせる。

イ　関心をもった作品を調べる

（個人の活動４ｈ）

日本とアジアさらに他の諸外国の美術作品を図書室の書籍から，自分の価値意識をもって主体的に選びノートにまとめ転写スケッチをする。西暦 1900 年以前に人類が創作したものを条件として，絵画，彫刻，デザイン，工芸，建築，生活用品など選択肢の幅を広げて，作品からよさや美しさなどを感じ取らせる。

②　美術史の推理と理解

ア　美術史を推理する

（グループの活動　1ｈ）

美術作品や文化遺産などを特定の時代や地域のみに限定された独自のものととらえるのではなく，過去から現在に続く大きな歴史の視点からとらえるために美術史年表を作成する。その際，生徒の興味関心ある作品スケッチと教員が用意した作品コピーを教科書やノートを参考にせず，作品の特徴や印象を直感的にとらえ分析し，時代や地域を推測しながら模造紙に貼り付ける。

イ　歴史上その位置に存在する理由を考える（グループの活動　1ｈ）

年表から一作品選び，１「選んだ理由と作品のよさや美しさ」２「その時代，その地域に貼った理由」３「他の作品との相違や共通性」を協議させノートにまとめる。

ウ　美術史年表を修正する

（グループの活動　1ｈ）

教科書やノートを参考にして正しい美術史年表に作り変える。その際，選んだ作品を基準に時代の流れを確認しながら貼り替える。

③　作品の背景調査

ア　作品の歴史的な位置付けを考える

（グループの活動　4ｈ）

選んだ作品が「歴史上その位置に存在する理由」について，作者の心情や意図，世界観，創作に影響を与えた事柄や時代の特徴，民族や気候風土の特質，地理的条件，宗教や信仰，社会や生活の在り方，さらに未来に影響を与えた事柄等を図書室の書籍や教科書から調査させる。また，推理させる。

作品のよさや美しさを感じ取り味わい，調べたり討論や批評をし合ったりした内容

をノートにまとめ，作品に対する理解を深めさせる。

イ　発表し，協議する

（全体の活動　1h）

予め用意された大型パネル１２枚の美術史年表に作品スケッチを貼り，調査したことや推理したことをグループごと発表する。作品や文化遺産の所在位置は宗教分布が分かる世界地図で確認する。発表では，1「作品の紹介」２「選んだ理由，作品のよさや美しさ」３「歴史上その位置に存在する理由」を調べた内容と推理し考察した内容とに分けて説明させる。又，身近なものを利用して作品を再現させる。聴講側生徒は発表内容をノートに記録し，質疑応答や協議に役立てる。各グループの発表ごと，調査内容の補足説明や推測した内容を否定せず検証したりする。

資料１　　調査発表作品一覧

ガウディ「サグラダ･ファミリア教会」 リチャード･エステス「新宿」 レオナルド･ダ･ヴィンチ「モナ･リザ」 黒田　清輝「舞妓」
ピカソ「テーブルに座るドラ･マール」 ピカソ「ゲルニカ」 道八「色絵寿老人置物」 ベラスケス「女官たち」 クフ，カフラー等「ギザの大ピラミッド」
マリーニ「ウルリッヒ･ガッサーの肖像」 ジャハーン「タージ･マハル」 クフ，カフラー等「ギザの大ピラミッド」 一筆斎　文調「山下京之助の玉依丸」

－　発表内容の協議例　－

・ベラスケスは双子説

・ピラミッドは王の墓説

・山下京乃助の職業　など

ウ　美術の概括的な変遷を理解する

（全体の活動　1h）

生徒が選んだ作品を中心に大まかな美術の流れを説明し，現代の生活にも息づく価値観に気付かせる。又，東西文化が，互いに影響し合って変遷し発展していることを理解させ，諸外国の異なる文化や歴史に敬意を払い尊重する態度を養う。

④　美術文化に対する仮説と理解

ア　仮説を立てる

（グループの活動　2h）

想像力を働かせ豊かなイメージを創出させるために，全体の美術史年表から更に作品を選び，１「作品の特徴」２「選んだ理由，よさや美しさ」３「歴史上その位置に存在する理由」を作品に込められた作者の思いや願い，情熱や精神，その国々の歴史や気候風土を背景として形成された特有の美術文化などを推測しながら仮設を立てさせる。又，作品に登場する人物は，どんな場面で何を考え，何をしているところかを考えさせる。作品は前回の発表と異なる地域から選ばせ，日本やアジアの美術の歴史や表現の特質に理解を深めさせる。

イ　発表，協議

（全体の活動　1h）

前回同様の発表形式で実施する。聴講側生徒は発表の内容が史実と異なった仮説であることを十分理解してノートに記録し，質疑応答や協議に役立てる。生徒が推理し発表した仮説をできるだけ否定せず，協議し、文献等の内容を解説する。研究者たちの異なった仮説も紹介し作品の特徴や表現様式を新たに分析させ，作品に対する幅広い見方や感じ方，考え方を獲得させ作品や文化財への理解を深めさせる。

資料２　　仮説発表作品一覧

菱川師宣「見返り美人」 北斎「富嶽三十六景　神奈川沖浪裏」 ボッティチェリ「春」 土田麦僊「舞妓林泉図」 葛飾北斎「富嶽三十六景　凱旋快晴」
始皇帝･洪武帝･他「万里の長城」 奈良美智「Little　Romana」 足利義満「金閣寺」 土田麦僊「舞妓林泉図」 作者不明「ウルネスの木造聖堂」
作者不明「聖獣の獅子像」 ドラクロア「民衆を率いる自由の女神」 作者不明「渦巻き文土器」 ロダン「考える人」

資料３　　解説及び協議内容一覧

･浮世絵の題材とジャポニスム ･ルネサンス絵画とギリシア彫刻の類似点 ･日本画の誕生と大和絵の特質
･万里の長城から読み取れる中国史 ･金箔の建築文化とジパング ･日本画の誕生 ･北欧の木造文化とバイキング
･獅子文化と諸外国の獅子像比較 ･民衆を導く女性の正体 ･土器文様の多様な解釈 ･考える不自然なポーズ

ウ　美術文化の流れを理解する

（全体の活動　1ｈ）

日本の美術は，時代の流れの中で多くの異文化を吸収咀嚼しつつ発展，変容し独自の文化を形成してきたという特質を，生徒が選んだ作品と生徒が発表した事柄を中心に大まかに説明する。絵巻，障壁画，浮世絵，大和絵，水墨画，日本画などの表現方法，題材，材料の特質などについて作品集を利用して，それらのよさや美しさを説明し，その相違や共通点を比較検討したりしながら，その特質を把握させる。

エ　学習を振り返る

（個人の活動　1ｈ）

感性を豊かに働かせて作品に対する自分としての意味や価値をつくりだし，美術文化についての理解を深められたかを確認するアンケートを実施して成果を検証する。

(3) 考察及び成果と課題

①　「調べる力を育成する」ことに関して

図書室の書籍と過去２０年間の美術教科書で調べさせたが，調査できる内容に限界もある。インターネットや地域の図書館を活用する工夫が必要であった。今回は生徒が選んだ作品を教員がインターネットで検索し情報の提供を行っている。

転写スケッチは作品の細部まで観察でき「何が描かれているのか」と全体や部分を能動的にじっくり探り，新たな視点でとらえ見方や感じ方を深める。事前に参考資料等でスケッチの種類を紹介し，鑑賞の学習では伝達型のスケッチを心掛けることを意識させた。但し時間を必要とし作品の印象を伝える表現に優劣が生じる。作品のコピーを利用する工夫も考えられる。

今回,生徒が主体的に選び調べた作品や文化財で学習が展開されていくことで，関心度は高まったと考えられる。しかし，大和絵に関心を示さない生徒が集まるクラスでは，日本絵画史に触れず学習を終わらせた反省が残る。今後，数回の発表の中で日本の伝統絵画を限定させた作品選択と調査をさせ，自国文化に興味関心をもたせ美術

文化の理解を深めさせたい。

② 「考える力を育成する」ことに関して

（予測させる，仮説を立てさせること）

単に知識の習得や作品の定まった価値を理解することに満足し，作品に対して自分なりの解釈をもてない生徒も多い。美術文化の理解を深める目的は，未来を創造することである。そのためには様々な視点で思いを巡らせ，自分の中に新しい価値をつくりだす必要がある。史実や作者の意図と異なってもかまわない自由な発想で鑑賞の能力は高まると考えられる。ひとつの作品でも多くの専門家たちの異なった仮説を紹介して解釈に答えがひとつではないことを理解させ，想像力を働かせ豊かなイメージを創出させる工夫が必要である。又，活用できる基本的知識がなければ鑑賞する楽しさも半減し，美術文化を理解することも困難である。諸外国の地図上の位置や気候，年表上の歴史的事柄など基礎的，基本的な知識は絶えず確認しながら学習を進めている。

③ 「言語活動を活用する」ことに関して

学習の導入時では，生徒は作品を漠然としか見ていない状態であり，ただ見ることが鑑賞と思っている者も多く「綺麗」とか「可愛い，面白い」「上手だ」などの感想しか言えない。じっくりと注意深く探る見方から始め，作品についての基礎的な見方や時代背景へ視野を広げさせ，徐々に自分なりの価値意識で文化理解を深める試みをしている。この学習を推進していく手立てとしては，調べたことを発表して知識を共有化したり,他者の発表から作品のよさや美しさを学び,さらに自由な発想で生まれた斬新な仮説を聞くなど言語活動の活用が最適である。発表では作者の意図とは異なるが，生徒独自の解釈で説明され幅広く作品を味わうことができる。そこから教師を含め多くの生徒が，自分一人では気付くことのできない視点やとらえ方，価値などに気付き，自分になかった他者の考えを取り入れながら作品を見直すことで，新しい見方を獲得し自分の価値意識が高められる。

３　研究の成果と課題

① 自分の価値意識で作品を選び，作品の歴史的位置付けや作者の意図などを主体的に調べることにより，関心度を高め作品の見方や感じ取る力を深める学習に成果がある。

② 作品の歴史的な位置付けを推測したり，美術文化に仮説を立てたりすることで，思考力が養われ，日本と諸外国の類似点を指摘するなど鑑賞する能力を高め，美術文化の理解を深める成果がある。

③ 言語活動を活用することで，他者の多くの考えを取り入れながら作品をみることができ，新しい自分の価値意識がつくりだされ鑑賞する能力が高まる成果がある。

資料４　「学習を振り返る」アンケート回答抜粋

ピカソ「テーブルに座るドラ･マール」

ドラ･マールはピカソの女好きに凄く困って思いつめている。自分だけを見てほしく，自分を描いてもらい悲しげな感じを出したが，その無言の訴えをピカソは気付くことなく終わった悲しい絵。

ピカソ「ゲルニカ」

モノクロで描かれ戦争の恐ろしさが伝わってくる。下書きの線が残っているが、上から違うものが描かれている。

道八「色絵寿老人置物」

遠くをじっと眺めている嬉しそうな表情。長い人生を振り返り苦悩や悲しみを乗り越え，いろんな人と喜びを分かち合ったことを思い出しながら，この先の未来に希望をもっている。

ベラスケス「女官たち」

国王夫妻の視点で描かれているが，ベラスケスは国王の位置で描いている。

アンドレ・マッソン「迷宮」

とても暗く恐ろしいイメージが強い。ずっと見ていると，どこか違う世界に吸い込まれて二度と出てこれなそう。マッソンは何か悩み事があってこのような暗い作品を描いていたのでは。左の目は助けを求め，右の目は怒りを表している。

ミケランジェロ「地獄におちた魂」

わがままな人生を送った人が地獄に落ち，「なぜ自分がこんなところにいるんだ。」と訴えている。今までの自分を振り返ると人のために何かをしようと思ったり，周りの人に感謝せずに生きてしまい，誰からも相手にされなくなったことに気付き自分に対する怒りを表している。

ダリ「記憶の固執」

時計はその時の記憶で，景色が殺風景で大切なはずの記憶がよれているところを見ると，あまり自分にとってよい記憶ではない。手前が暗いのに比べ奥の世界は幸せそうなイメージがある。光と影が記憶のよう。時計に虫がたかっているのは他人にとっては単純な記憶を表している。

エステス「新宿」

シュールリアリズムからの影響があり遠近法が使われている。角度を変えた写真を組み合わせて独自の空間構成で描かれている。

岡本太郎「森の掟」

ファスナーの狼がこの森の主で，掟を破るものを喰おうとしている。小動物が逃げ隠れする。明るい色を使っており，不思議な世界観に見えるが，実は弱肉強食を表している。

フォロン「ブルーシャドウ」

太陽のような赤い目以外のほとんどが淡いブルーで描かれていて夜明け前のような感じがする。誰かに見られているようで少し怖い気がする。

舟越桂「音のない夜に」

なんの音もないシーンとした夜，金縛りにあって自分の首から下が自分のものでないような，すごく怖く恐ろしい状態になった作品。耳がないのは音が聞こえてこないからだ。

ボッティチェリ「春」

春が来たことを皆とても喜んでいて嬉しそうな顔つき。はじのほうには，まだ冬の形が残っている。冬の神はまだ春が到来してほしくない。春の神は心が広いので広範囲で登場している。

フラ・アンジェリコ「受胎告知」

なかなか子どもを授かることのできない女性のもとに天使が舞い降り，子どもを授かることが出来るお告げをする。女性はうれしくてお腹を抱きかかえている。もしかしたら，天使は生まれたが何らかの理由ですぐ死んでしまい，次に母のお腹に宿った妹のことを知らせに来たのでは。

黒田清輝「舞妓」

少し前の作品「読書」と比較すると塗り方は荒っぽい。着物は地味なイメージだが，赤などを取り入れ主役を強調している。右側の人は主役より目立たない色で表現していてバランスよく描かれている。右側の人の表情は横顔でよく分からないが，主役の表情からみて何かを忠告をしているのではないか。

クレモニーニ「欲望の鏡」

絵だけでは何が何だか分からないが，題名で想像できる。男性は大きい鏡を見ながら「何故自分だけこんな醜い顔なんだ」とうなだれている。きっと小さい鏡を見ながら自分の理想の顔を思い浮かべているのだろう。

南桂子「２人の少女と風せん」

姉妹は，お母さんにお使いを頼まれてしょうがなく出かけた。だからやる気なさそうな顔つき。帰ってくるときに風船を持っている子が鳥に気が付いて立ち止まった。作者は，こんな平凡な日常の一コマを版画にすることで心の休息がとれるようなものにした。

岸田劉生「道路と土手と塀」

身近にあるものを何の違和感もなく「見慣れた」という感覚を描いている。作者は，道の先を想像させたかったのだろう。道の中心を横切っている長い影が，日常の切り取った一部を強調している。

ロダン「考える人」

今の私たちは裕福に過ごしていて昔の貧しい人たちの気持ちを理解していない。日頃のことを当たり前に思わず生活してほしいと思い「考える人」を作った。

奈良美智「Little Romana」

散髪してもらい，鏡を見せられたときの表情。

学校名（ふりがな）	北海道おといねっぷ（ほっかいどう） 美術工芸高等学校（びじゅつこうげいこうとうがっこう）

校 長 名：花松　正彦

所 在 地：北海道中川郡音威子府村字音威子府181番地1

電話番号：01656-5-3044

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	芸術（工芸Ⅰ）

【研究成果のポイント】

「工芸科」の特色を生かし，系統的かつ創造的な学習が行われるよう，教育課程の研究に取り組んだ。感性を高める学習のために様々な素材を取り入れ，授業及び検証を行った。

教材開発と指導方法の研究，芸術で「工芸Ⅰ」を行っている学校や芸術の先進校への視察研修，大学などの研究機関での資料収集を積極的に行った。

検証を進めていく上で，感性の育成と創造力の育成が連動していることが明らかになった。その結果，感性と創造力の関係には相乗効果があり，相互で能力が高まっていくことがわかった。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

音威子府村は，北海道の北部に位置し，人口は900人ほどと北海道で最も少ない村である。村全体が森林に囲まれており自然豊かな環境のもと，木工芸品やそば，山菜などが有名である。また，彫刻家・砂澤ビッキ氏が創作活動を行った地としても知られている。

本校は，北海道唯一の「工芸科」の高等学校で，教育課程に木材工芸を取り入れ，ものづくりを通して，造形体験を重ね，創造力の育成や，豊かな心の育成に努めている。

２　学校の概要（平成22年5月1日現在）

課程	学科	１年		２年		３年		４年		計	
		学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全日制	工芸科	1	40	1	42	1	37			3	119
	計	1	40	1	42	1	37			3	119
計		1	40	1	42	1	37			3	119

教員数　　１３名（　１名）

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

(1) 研究主題

感性を高め，創造的な表現と鑑賞の能力の育成を図る指導方法の研究

(2) 研究主題設定の理由

本校は「工芸コース」と「美術コース」を設置する小規模の村立工芸科高校であり，全国各地から工芸や美術に関心を持った多様な生徒が入学している。「描くこと」，「つくること」，「対話すること」を通して豊かな人間性の育成を目指しており，一人一人の個性を尊重しながら，創造力の育成を図り，感性を豊かにする教育活動を一層充実させることをねらいとして，研究主題を設定した。

(3) 取組体制

①総　　括…校長
②総　　務…教頭，教務部
③渉　　外…事務長
④調 査 研 究…工芸科教諭２名
⑤調査研究協力…工芸科教諭４名

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	1　工芸科高校としての特色を生かし，新学習指導要領の趣旨を具体化する教育課程の研究を行った。 2　創造力の育成を図る適切な題材の開発と指導方法の研究を行った。 3　学ぶ意欲を喚起する評価規準・評価方法の研究を行った。 4　先進校の視察研修や大学などの研究機関での資料収集を行った。
平成22年度	1　校内教科研究会で研究概要と成果の研究協議を行う。 2　研究概要と成果をWebページに公開し，広く意見聴取を行う。 3　調査研究をまとめた報告書を作成し，関係機関等へ送付するとともに，Webページで公開する。

２　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究の重点1

新学習指導要領の趣旨を踏まえた指導方法・評価方法の工夫改善

○　具体的な取組

ア　工芸科目の３年間の学習内容が系統的なものになるとともに，幅広い創造活動へと結び付くよう，新学指導要領の趣旨を踏まえた教育課程の編成を行った。具体的には，「工芸Ⅰ」において，「真鍮によるペーパーナイフ」や「カシュー漆芸」といった新しい題材を取り入れた。

イ　生徒に，自分が考えているデザイン等をスケッチブックに描かせ，制作の構想や表現の工夫等について説明させたり，生徒同士で批評し合うなど，言語活動を意識した指導を取り入れた。

ウ　制作過程の中で生徒との問答を繰り返し，発想力や表現力などをきめ細かく評価する方法を取り入れた。

(2) 研究の重点2

感性を高め，創造的な表現と鑑賞能力の育成を図る指導方法の工夫改善

○　具体的な取組

ア　感性を高めるため指導の重点の整理

▶感性を高めるためには，次の要素が重要であると考えた。

(ｱ) 感性に働きかける美的創作体験の環境や機会をつくること。

(ｲ) 感性をはぐくむための題材の設定をすること。

(ｳ) 作品完成までの準備や手順，制作過程の充実を図ること。

▶授業（特に「工芸Ⅰ」）においては，この３つの要素を関連付け展開するとともに,次の２点を重視して指導した。

(ｱ) 感性を働かせて，深い価値や心情を感じ取る力を高めること。

(ｲ) 工芸作品のよさや美しさを理解し，創造的な表現と鑑賞の能力を育てること。

イ　「工芸Ⅰ」の授業における取組

(ｱ) 切る・削る・塗る等の作業を通じて，多様な素材に触れ，素材・用具に対する知識の定着を図り，感覚を通して理解させるとともに，技法習得を通じて，素材の生かし方，創意工夫して制作する技能や意欲を高める指導を行った。

(ｲ) 創造的な表現と鑑賞の能力を育てるためには多様な表現技法を学ぶとともに，日本の伝統や文化についての理解を深めることが大切であると考えて，題材を設定し，作品の制作に取り組ませた。

(ｳ)　多様なものの見方，よさや美しさを感じ取ることができるようにするため，卒業生の作品についての印象をまとめたり，制作者の心情や意図を考え討論し合ったりする場面を設定するなどして，作品に求められる

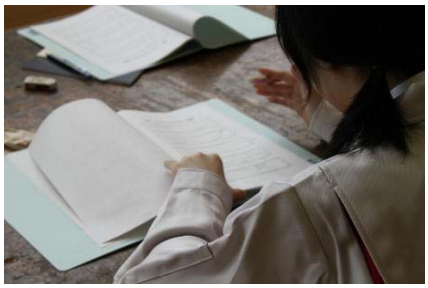
機能や美しさなどについて考えさせる指導を行った。

■「真鍮によるペーパーナイフづくり」

・金工

（素材理解・意匠・切削・研磨・機能・鑑賞）

真鍮を板状のものから切り出す（素材理解）



アイデアスケッチを描く（意匠）

ボール盤でアイデアの形に削り出し（切削）

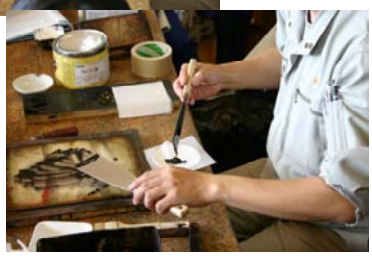
金やすり・サンディングペーパー・
耐水ペーパーで研磨していく（研磨）

完成した作品で使用，鑑賞をする（機能・鑑賞）

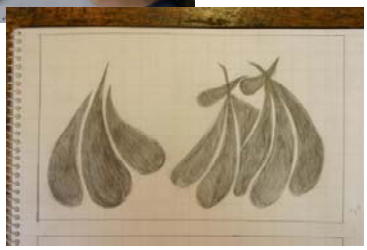
■「カシュー漆芸による小物の製作」

・漆芸

（素材理解・意匠・塗り・研ぎ出し・鑑賞）



素材・使用方法についての説明（素材理解）



アイデアスケッチを描く（意匠）

下地作り

カシュー塗料による塗り

卵殻技法

耐水ペーペー・研磨材による研ぎ出し（研磨）

作品完成後に展示・鑑賞

3　研究の成果と課題

(1) 成果

・　１学年においては，木材以外の素材を扱うことにより，工芸に対する興味・関心を高めることができた。また，２学年以降で扱う木工芸においても，異なる素材の加工技法を活用できるようになり，作品の完成度が上がった。また，感性を高め，創造的な表現と鑑賞の能力を育成し，系統的かつ具体的な指導や評価を行うことができた。

・　授業において，①素材に対する感性を高める，②技法習得から感性を高める，③用途と美しさを考えた機能美から感性を高めることを重点化し指導を行ったことにより，生徒は多様な題材に興味・関心を示し，意欲的に制作に取り組んだ。素材に対する理解や技法の習得，用途と美しさを考えた機能的な表現については，目標を達成することができた。

・　感性は，表現や鑑賞の活動を通して，豊かになるものであり，感性を高めることが，創造的な表現や鑑賞の能力の育成につながることが明らかになった。感性と創造的な表現や鑑賞の能力を相乗的に高めることにより，より豊かな芸術活動がおこなわれ，生徒の創造性が広がっていった。

(2) 課題

今後の課題としては，いかに指導方法を充実させ，芸術教育の重要性が高等教育にはなくてはならないものかを広く伝えていく必要がある。

平成２２年度研究成果報告書≪教育課程≫

学校名	国立東京学芸大学附属高等学校

校 長 名： 新田 英雄
所 在 地： 東京都世田谷区下馬 4-1-5
電話番号： 03-3421-5151

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究

研究対象教科等	芸術（工芸）

≪研究主題≫

つくりながら考え，考えながらつくるプロセスを通して，探究心を高め，思考し，判断し，表現する能力をはぐくむ指導方法の研究

【研究の要点】

平成21年度は「練込のマグカップ制作」という題材において,制作のプロセスの中で,つくっては考え,振り返り検証し改善し創意工夫を行う過程を通じて,「手で判断する力」をはぐくみ,生徒自身が探求心を高め思考力,判断力,表現力の伸長を目指した。マグカップを1客ずつ5客制作する「成形→素焼き→本焼」プロセスを繰り返す中で,次第に手際よく,緻密で,カップの口元や,取手の形状においても洗練されてきた。各プロセスにおいて検証シート等により,振り返りを行うとともに,他者と成果を共有した結果,生徒自身が自己評価力を高めた。教師側も緻密な指導計画の立案により指導内容が明確になった。

平成22年度は新学習指導要領で新たに設定された,「社会と工芸」の題材開発実践を行った。生徒の所属するクラスのために,クラス対抗行事において団結して得た賞状を顕彰し,ホームルームを荘厳する「額縁の制作」を促した。発想構想段階では,自分のクラスに対する制作のため意欲的に取りかかったが「賞状」を生かす存在である「額縁」の名脇役としての構想に戸惑いを感じる生徒も見られた。その後,制作プロセスの中で,難しさを感じながらも素材・技法などの工夫を通して魅力を感じ,主体的に取り組む生徒が増加した。

Ⅰ 研究指定校の概要

１ 学校・地域の特色及び実態

本校は,東京学芸大学に附属する全日制の高等学校であり,心身の発達に応じた普通教育を行うとともに,大学の計画に基づき,他の附属学校との連携を図りつつ,教員養成のための教育実習の実施にあたることを特色としている。また「本物志向」の教育を校風に掲げ全ての教科科目において実践している。

学級規模は,１学年８クラスで,３つある附属中学校出身者（約 90 名）や帰国生（約 15 名）をあわせて,男女ほぼ同数の生徒が在籍している。昭和 50 年度より,タイ王国からの留学生を毎年約５名ずつ受け入れており,さまざまな教育環境を経験した生徒達が集まっている。

２ 学校の概要（平成 22 年 4 月 5 日現在）

課程	学科	1年		2年		3年		計	
		学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全日制	普通科	8	360	8	366	8	342	24	1068

教員数 55（1名） 芸術（工芸）に関する科目の開設状況

１年選択必修科目 芸術Ⅰ（工芸）（２単位）
２年選択必修科目 芸術Ⅱ（工芸）（１単位）
３年選択科目 芸術Ⅲ（工芸）（２単位）

芸術科目は,選択必修科目として音楽,美術,工芸,書道の４科目が開設され,1年入学時に４つの科目から生徒の興味関心に応じて選択する。毎年芸術（工芸）は,65～90 名ほどが選択する。

一学年全８組を２組のペアにして,４つの講座で実施。芸術（工芸）の１つの講座は,16～23 人くらいで授業を行っている。

Ⅱ 研究の内容及び成果等

１ 研究主題等

(1) 研究主題

つくりながら考え，考えながらつくるプロセスを通して，探究心を高め，思考し，判断し，表現する能力をはぐくむ指導方法の研究

(2) 研究主題設定の理由

本校では,無垢な素材に向かい制作過程を通じ,思考しつくり,つくって考え,先人の知恵（伝統文化）から学び,さらに対話を通じて他者と成果を共有する実践を行ってきた。本研究にあたり,今まで行ってきた実践手法や指導方法の洗い直しを行うとともに,教育内容の整理を行い,新学習指導要領で謳われている,思考力,判断力,表現力のより一層の充実を目的とし研究主題とした。

(3) 取組体制

・専任の教員は１名なので,中心となって調査研究を行う。非常勤講師には研究対象授業の実践協力を仰ぐ。

・本校の研究支援体制

① 研究全体は本校分掌の研究部のもとに行う。
② 校長・副校長の指導助言を仰ぐ。

・東京学芸大学との連携

①東京学芸大学美術科及び美術科工芸研究室,附属学校研究会（図画工作・美術部会）との連携協力。

②教育実習生に対して研究の目的・趣旨の理解を促し,授業題材の工夫・実践を指導する。

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	1学期	・「つくりながら考え,考えながらつくる」授業を通じ,題材の内容,指導方法・評価規準・評価方法を精査。各制作プロセスにおいて取り組み状況を把握。
	2学期	・研究の立ち位置を検討し,指導方法・評価規準・評価方法の改善について研究。実践研究内容について11月7日（土）公開研究大会において授業実践・研究協議会を行った。
	3学期	・「つくりながら考え,考えながらつくる」授業の,指導方法・評価規準・評価方法についてさらに検討を行い,中間報告・研究協議会を実施。平成22年度の研究課題と研究方法について協議を行った。
平成22年度	1学期	・平成21年度に改善工夫なされた指導方法・評価規準・評価方法を応用し,工芸Ⅱで「社会と工芸」についての題材の企画。 ・研究先進校視察（平成22年5月30日～6月1日） 北海道おといねっぷ美術工芸高等学校 北海道三笠市立新幌内小学校 ・夏休み教育実習生を伴い,「社会と工芸」の題材研究のため、額縁作家訪問。
	2学期	・「社会と工芸」についての題材の実践。
	3学期	・それまでの研究成果を第44回日本美術教育研究発表会（於：武蔵野美術大学）にて口頭発表。（平成22年10月24日） ・「社会と工芸」についての題材のまとめ。 ・平成23年1月27日　平成22年度研究協議会指定校発表。 ・第44回日本美術教育研究発表会の内容をまとめ、日本美術教育研究論集 No.44 2010 にて研究実践成果を発表。

2　研究内容及び具体的な研究活動

(1) 研究の重点

1 作品制作を通して多様な発想構想を促し,原理を理解した構想を練り上げ,振り返りながら素材にあった技法を吟味し創意工夫し表現できる力をはぐくむ指導を行った。

2 感覚的思考と論理的思考による発想・構想を実体験により吟味判断し創意工夫する過程から効果的な評価を行った。

3 新学習指導要領で新たに設けられた「社会と工芸」に対応した題材開発を行い実践した。

(2)具体的な取組

1 の具体的な取組

研究構想図

工芸制作において始めに発想構想の段階がある。発想構想の当初では,生徒自身の内的感覚をもとに自由にイメージを膨らます感覚的思考が行われる。それを基に具体的に素材の性質に由来する技法や手順,制作の段取りなどを踏まえ,当初のイメージを大切にしながらも,論理的な構想へと進化・深化する。本研究では,工芸制作過程（主に発想・構想時）における以上のような思考を「感覚的思考」と「論理的思考」とする。

感覚的思考

感覚的に自由な発想を基に図案などを構想する思考で内的感覚による思考。

論理的思考

素材や技法の性質を考えた思考や制作プロセスの段取りを構想する,論理性を大切にした思考。

感覚的思考と論理的思考により,構想が練られ実際の工芸制作に入る。

ここで,本研究の一番大切な試行錯誤を通して「つくって考え,考えてつくる」プロセスにより創意工夫される。「感覚的思考」及び「論理的思考」からの構想から自分の最も身近なセンサーである「手」を通した素材との対話により,性質を知り,それを生かすための技法や手順・道具の選択,軌道修正などの吟味・工夫がなされる。実際の制作プロセスの中でこれを繰り返すことで「手」を通した「みかた＝判断力」を自らはぐくむことができる。このような「手で判断する力」を身につけることは,全ての未知の事象に対して「判断力」の汎用的な基礎をはぐくむことに他ならない。バーチャルなものではない,素材や他者と対話しながら,自らも生かす工芸制作を通した表現力も同時に高めることになるであろう。また五感で鑑賞する機会を設け他者と共感・共有化することを通して,大きな意味での「生きる力」がはぐくまれることを目的とした。

今回,「つくって考え、考えてつくる」プロセスにおいてPDCA サイクルの理論を当てはめ,生徒自身が自分の力で,計画（plan）→実行（do）→評価（check）→改善（act)を繰り返しながら,自己を耕すことを意識化するための研究実践手法とした。

↓Plan　計画（構想・工程設計）
↓Do　　実行（制作してみる）
↓Check 評価（振り返り・検証・吟味）
↓Act　　改善（次の Plan へ）

PDCA サイクル

生産プロセスの中で,品質の維持向上を推進する手だてとして,Plan（計画）→ Do（実行）→ Check（評価）→ Act（改善）の 4 段階を繰り返すことによって,業務を継続的に改善する手法。1950 年代にW・エドワーズ・デミング博士(Dr.William Edwards Deming,1900-1993)が提案した。

日本の教育界でも授業改善の手法として応用されている。

題材「練込み模様のマグカップの制作」

「練込み模様のマグカップの制作」は 20 年以上,本校の芸術（工芸）:1 年生の題材として歴代三代の専任教諭と毎年訪れる教育実習生及び生徒実践から技法や段取りが創意工夫されてきた題材である。

制作工程概要（1学期～2学期　全３６時間）

1 学期

１次　　**練込み模様の図案制作**

２次　　**制作工程表設計**
・練込み模様を作り出す赤土と白土の積む工程と手順を自ら設計する。

３次　　**練込み粘土ブロック制作**
・自分で書き上げた,図案と工程図を基に実際に粘土を積層し金太郎飴状態の粘土ブロックを完成する。

夏休み

４次　　**粘土ブロックの保存と定着**
・積層した粘土ブロックは一体化するため,加重しながら約１ヶ月間寝かせる。
(水分保持のため確実に密閉)

2 学期

５次　　**マグカップ成形**
・５cm 厚につくりあげた,金太郎飴状態の粘土ブロックを５㎜厚にスライスし,空き缶に巻き,デザインした取手と底を接着後,缶を抜き口元を削って１個ずつマグカップ成形する。

６次　　**素焼き・施柚**
・800℃で素焼きの後,表面や口もとを紙ヤスリで整え,透明釉を施柚する。

７次　　**本焼き**
・1250℃で本焼きを行う。

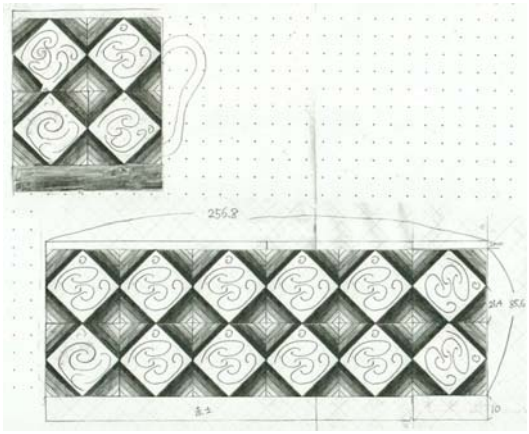
８次　　**「成形→素焼き→紙ヤスリにより整え→施柚→本焼き」**
上記工程を１個ずつ繰り返す。(5 個以上制作)

９次　　**相互鑑賞会**（この後も制作は繰り返される）

・練り込み模様の展開図及び制作工程図の構想

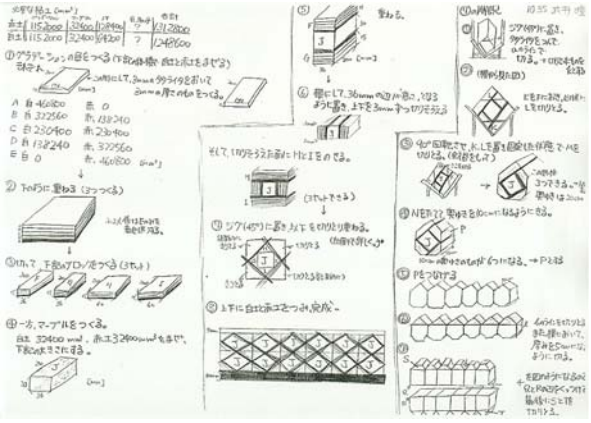
〇制作工程図を基に練込模様の粘土ブロック積層

練り込み模様の粘土断面の図案を自身の感覚的な発想を大切にしつつ,練込模様の粘土積層の方法を吟味し試行錯誤して,粘土断面図を構想し,その粘土断面図を基に制作プロセス（制作工程図）を自分で築きあげていく。この制作工程図に基づいて金太郎飴状態の粘土ブロックを積層する。
(試行錯誤・創意工夫)



練込模様粘土断面デザイン（生徒作成）

練込み模様の粘土積み作業（生徒作品）



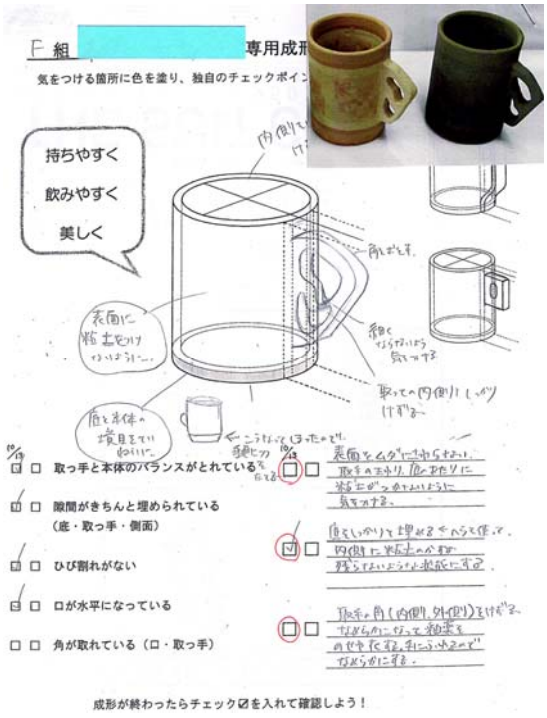
練込模様粘土ブロック制作工程図（生徒作成）

左：積層された粘土ブロック
右：５ミリ厚にスライスし粘土シートを缶に巻き付けて成形している生徒

○マグカップを１客ずつ５客制作
「成形→素焼き→本焼」のプロセスを繰り返す中での制作方法の改善。（吟味,判断,創意工夫）

成形→素焼→釉がけ→本焼による指導サンプル

それぞれの工程での振り返り・検証ワークシートの記入による意識化を行った。



制作プロセス時の検証シート（生徒作成）

取手形状の工夫による改善
初期制作　→　最後期制作

５客以上完成した練り込みのマグカップ

2の具体的な取組

① 自己評価

（制作工程途中経過での検証・評価、制作後の鑑賞会における相互鑑賞検証評価,自宅において使用し,家庭での家族評価）

相互鑑賞会にて実際にお茶を入れて鑑賞

自宅で使用後の家族評価レポート　（生徒作品）

②教師の評価（感覚的思考力・論理的思考力の具体的事象を通して創意工夫できる力の検証）

・図案・制作工程図,制作途中経過検証シート,自己・相互鑑賞シート,作品を通じて変容と創意工夫を検証した。

3の具体的な取組

題材「クラスのための賞状を入れる額縁制作」

平成22年度工芸Ⅱにおいて、「社会と工芸」の題材として,所属クラスの団結の象徴である,クラスで獲得した賞状を入れ顕彰し,教室を荘厳するための「額縁」の制作題材の開発を行った。（教育実習生と共に）

※クラスのための賞状を引き立てる存在である「額縁」という存在を意識した構想を促した。

中身を引き立てる存在である額縁は主張しすぎる「個性」であってはならない。そのような構想は,当初生徒を戸惑わせたものの,実際の制作工程の中で,木の素材を生かした造形や,木工具の使用方法,表面処理の工夫などに触れて意欲を持って制作することができた。

○以下は9月10月に本校に受け入れ、「社会と工芸」の題材の指導を担当した,教育実習生制作の学習指導案の中の,題材設定の理由と題材の目標である。

芸術科（工芸）指導案

日時　平成22年9月27日（月）第3／4校時

場所　東京学芸大学附属高等学校　工芸室

対象　第2学年CGクラス／EHクラス

指導教員　尾澤　勇　教諭

教育実習生　谷脇　もも

題材名　「木彫を基本とした,クラスのための賞状を入れる額縁制作」

領域　A表現（イ)社会と工芸

題材設定の理由：

指導要領の改訂により,工芸Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの題材に「社会と工芸」が加わった。これを受け,今回は生徒にとって最も身近な社会である「クラス」のために額縁を制作する。今まで自分のためだった作品とは違い,人に共感されて初めて意味を成す作品である。出来上がった作品を受け取る相手＝クラスメイトのことを考えて制作すると,表現や思い入れも変わってくる事を学ばせたい。

東京学芸大学附属高等学校では辛夷祭や合唱祭など,一年間の間に様々な行事が行われる。さらに二年次のクラスは三年生まで持ち上がりのため,行事を通じてクラスの団結力は一層強まるはずである。本授業では,行事で獲得した賞状を飾るための額縁を制作する。生徒各々が体験したこと,感じたことをデザインに反映し,クラス（社会）に対する思いを具現化することで,クラスに還元する。額縁を見たクラスメイトから自分への賞賛や評価を通して,クラス（社会）における自我の確立を促したい。つまり自分がクラスにおいてどのような存在なのか,自分がクラスの為にできることは何か,そしてクラスとは自分にとって何なのか,以上のことを考え,自己を育てるための題材なのである。

また,木という素材に触れることで粘土や金属との違いを感じ,素材に適した道具や技法を用いて表現の幅を広げる。木ならではの表現を味わい,愉しんでほしい。

この授業は前半のデザインが感覚的思考による発想・構想で,後半の本体制作が技術的な裏付けによる発想・構想である。頭の中にある自由な発想を,どのように実物に落とし込むか,そして最初の自由な発想を工芸の技術で実現可能か,という点を照らし合わせつつ構想していく能力を育てたい。一貫して大切なのは,自分の作りたいものと人のために作るものとの間に生じるジレンマ,そして「クラスのために作っている」という意識や「木」という生の素材を扱う中で,当然ながら思うように作業が進まないジレンマである。この,思うようにいかず悩む時,さらには木を扱う技法の意外な面白さに気付く時こそが生徒にとって成長の時であり,課題を通して経験させなければならない最重要点である。この経験により生徒は試行錯誤し,より良いものへと作品を昇華させてゆくのだ。最後に鑑賞会を開き,作品をクラスで共有する。自分のためならば自分が良いと思うところで終わって良いが,この課題はクラスメイトが良いと思ってくれることにより終わることができる。クラスに感謝され,評価されることで作者はクラスに所属している実感を持ち,貢献している自分がクラスにおいてどのような存在かという自己認識をすることができるであろう。このようにこの課題の出発点である「社会と工芸」というテーマに帰結する。

題材の目標

・所属するクラス（社会）のための賞状を入れる額縁に関心を持ち,そのねらいや願いをもとに意欲的に構想することができる。（関・芸）

・額縁の有用性や機能を考え「木」の特性を理解し,表現技法・用具・手順などを検討し創意工夫して制作することができる。（創・関）

・クラスで共有し,お互いの作品に共感する中で,作者の願いや意図したもの,作品の良さや美しさを感じ取り味わうことができる。（芸・鑑）

◆評価の観点

関心・意欲・態度→（関）　芸術的な感受と表現の工夫→（芸）

創造的な表現の技能→（創）鑑賞の能力→（鑑）

作成：平成22年度教育実習生　東京学芸大学　谷脇　もも

制作工程概要（2学期～3学期　全15時間）

2学期

1次　**図案制作**

・クラスのためというねらいからの構想から,技法を念頭にした図案を作成する。

2次　**フレーム組み**

・四隅を45度の角度で切断の後、泥足（厚み調整のための足部分）の接合を行う。

3次　**造形・彫刻・モールディング工程**

・自分で描き上げた,図案を基に実際に鉋・木鑢などでの削り及び木彫などや,紙粘土などでの盛り上げ部の作成を行う。

3学期

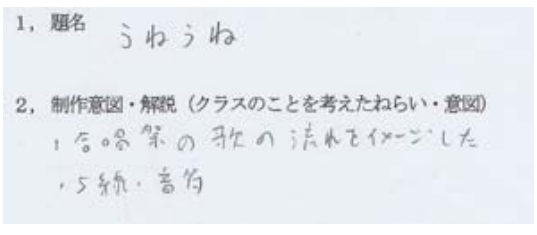
4次　**細部彫刻・装飾及び表面処理（塗装）**

・各自,ねらいに応じ工夫し仕上げを行う。

5次　**各クラスでの鑑賞会**

・各所属クラスにて,実際の賞状などを入れた鑑賞会を行い,クラスメイトや担任による共有化や鑑賞・評価を行う。

※今回は2年次内に鑑賞会が持てなかったことから3年次に時間を設けて実施予定。



生徒制作意図

3，主役（賞状）をいかす、名脇役たる額縁のデザインができましたか。
具体的に記述しなさい。（モチーフとその活かし方→その方法→造形・素材の活かし方・彫刻・装飾・着彩）

青空の流れを表現したかった。
青竹をのせればもっと涼しくなると思う
水面が静かにたゆたっているので色はぬりたくない

図案（生徒作品）

彫刻作業

鋸による４５度切断及び額縁の彫刻・鉋かけ

着色・塗装する生徒

生徒完成作品（過去の辛夷杯賞状を入れた状態）

「調和」

〇以下は上図の作者による「額縁制作のまとめ報告書」の内容である。

1，額縁の題名　　「調和」

2，表面仕上げ（細部彫刻・仕上げ方法・加飾）について意図した展開・意外だった展開、最終的な仕上げについて具体的に感想を記述してください。

しっかりと形が出るように深く彫り込みを入れた。細かい部分はかなり大変だったが,ジェッソをぬってもしっかり形がでるようにできた。後で塗料をぬった時も銀色をのせた部分の形がはっきりと出せたので,大変だったが,しっかり彫ってよかったと感じた。最初の造形や彫りを最後に仕上げで生かすことができて良かったと思う。

3，今回，自分の所属する集団（クラス）のための作品制作であったが，そのねらいを額縁にあらわすことができたか。また，自身の作品でもあるということに戸惑いはなかったか、その点についても記述してください。

最初にデザインを考えた時は,クラスのためにつくるということの意味が理解できなかったが,徐々にクラスの賞状を入れるにはどんな額にすれば良いのかということを考えて,テーマを考えていくというように変えられたと思う。また,そのテーマを考えたことで後のプロセスで,デザインを変更し,よりよい作品を目指すことができた。

4，３年生になった時点でクラスの人達にお披露目をしようと思います。その時あなたは，どのように自分が制作した額縁を紹介しますか。概要を記述してください。

クラスの賞状を入れる額縁ということで,「調和」ということを一つのテーマにして作品をつくった。額そのものの形をけずって凹凸が,はっきりと出るようにし,そこに流線型の模様を彫った。彫りをしっかり入れることができたので,その後,青と銀の塗料を塗ったときに,陰影が出たことが良かったと思う。地となる色を青にしたので落ちついた印象を出すことができた。

「体育大会」
紙粘土で制作した装飾（リボン）を木部に埋め込んだ作品
リボンは優勝トロフィーのリボンを象徴している。

木彫の木地を生かしながら、凸部を金色で仕上げた作品

「ライン×Line」
緻密な木彫を生かした作品
うちのクラスは派手なものは合わないと思うので，落ちついた雰囲気に仕上げたかった。

「完成しました！」
みんなが持っているパズルのピースがクラスの団結に必要です。ジグソーパズルが完成しました！額縁の真ん中にあります。

「うねうね」
音符をモザイクタイルを埋め込むことで表現した作品
合唱祭で感じた音楽の流れを表現した。

「変遷」
彫刻した模様の中に透明樹脂を充填した作品

C 組は、常に変化し続けるという意味でフレームを斜面に削り円からハートへ模様が変化するデザインにした。

○以下は「２年間の工芸授業のまとめ報告書」の中で各自の記述内容である。

設問：２年間の工芸の制作・鑑賞を通して、大切だと思ったことや、今後にいきると思うことを具体的に記述してください。

・様々な素材と,それぞれの仕上げの方法を知り,自分でそれを選んでいくことで,素材にはそれぞれ適した表現の方法があることが分かった。他の人とデザインを比較することで,別の視点や着想に気付くことも多かった。工芸に限らず,他の部分でも場に合った方法,柔軟な考え方を大切にしたい。

・1年生のマグカップ作りが本当に大変だったので,2年生での制作がそれほど苦にならなかった。忍耐強さは確実に培われたと思う。また、素材によってデザインが制限されたり,制作の過程で思わぬ変化が表れても,それに適応する訓練になったと思う。

・まず,計画的に物事を進める能力だと思う。工芸の作品は1日や2日で完成させられるものではないので,完成予定日から逆算して作業を進めなければならなかった。また,工芸には意外と算数や化学なども必要であり,面白かった。特に1年の時のマグカップでは相当,図形や空間把握能力が上がったように思う。他の人の作品を見ていると,絵がとてもうまくてセンスがあるなと思う人から,独創性に優れていて引きつけられるものまで様々だった。材料など与えられたものから,いかに自分らしい味を出していけるかということも考えさせられ,身についた能力だと思う。

・2年間の工芸の授業で学んだことは,大きく2つ。まず,先を見通して行動するということ。工芸では,完成の概観を決めてから,そのためにはどういう材料やどういう素材を用いて, どういうプロセスを通して自分の理想に近づけていくのかということが重要になってくる。今まで,作品を数々仕上げてくる中で1つでも間違った道を選ぶと,もう後戻り出来ないし,結果が大きく変わってしまうということを知った。これは,自分の人生に関しても言えることだと思う。自分の将来の理想像を描きそのために自分が道を決め,その道を信じて生きていく。一度間違えるともう後戻りはできなくて進むしかない。それを失敗のまま進んでいくのか,それを努力次第で成功へ切りかえていくのか,それも自分によるのだということは人生ととても似ているなと思う。もう1つは,どんなに忙しくても,面倒だと思ってしまう時でも最後まであきらめずに努力を続けていくことの大切さだ。2年間の工芸を通して本当に忙しくて大変だと思ったし,なかなか自分の思い通りにいかなくてあきらめたくなることも,何度もあった。でも,そこでそれをのりこえることが本当に大事なことなのだと思った。

(3) 考察及び成果と課題

図案に基づいて論理的思考により構想,その後の繰り返し制作しながら思考し検証するなかで作品を表現する力を深める生徒が多く育ってきた。題材の導入の図案制作場面で多様な発想をいかに導き出すのか具体的方法論を今後も模索し工夫する必要性を感じる。技法やプロセスを伝え過ぎると,感覚的な自由な発想が出にくくなり,自由すぎても,素材や技法の制約で大幅な変更が必要となり当初の感性が生かせなくなるおそれがある。これは全ての工芸の学びに当てはまることである。生徒にとって,工芸で扱う素材はほとんどの場合,未知の存在である。発想のきっかけのラフスケッチ（感覚的思考による発想）から,素材の特性や技法・道具の選択などを念頭にした論理的思考による構想への変換をいかに教師としてサポートできるかが,工芸制作を通じた教育の大きな課題であると痛感した。今後も工夫改善に努めたい。

制作及び鑑賞の過程や振り返る検証,鑑賞の中で,次に生かす自己評価及び制作後の自己鑑賞・評価は多様な視点・観点で深めることができた。事後の鑑賞シートの記述にも反映されていた。結果として生徒自身の自己評価力が高まった。今後の課題として,検証シートの発問内容のさらなる工夫や生徒の自己評価力を高めるために意識して場面設定を行う必要がある。

芸術（工芸）の授業において, 本実践のような制作プロセスでの振り返りを意識化し, 生徒自身で改善点や鑑賞の観点を発見することができる「目」をはぐくむ学習形態は学校の実態にあわせて様々な題材に応用することができると感じた。

平成 22 年度は新学習指導要領の「社会と工芸」を念頭に他者に対する意識を持ち社会的視点に立った題材の開発及びその指導及び評価の具体的実践（平成 22 年度）を行った。

他者（社会）のための制作は自分のための制作と異なり意識的に意欲を喚起する工夫が必要となる。今回は身近な,自ら所属するクラスのためということで提示を行った。

中身を引き立てる存在である「額縁」という工芸は,それ自体,他者を生かす社会的工芸として有効な題材であると思う。

社会と工芸の題材は,生徒が意欲的になることができる題材探しが最も重要なので,今後も生徒にとって身近な社会の中での題材探しを行いたい。

「クラスのための賞状額縁制作」の題材については,手探り状態からのスタートであり,制作期間や時間配分,指導及び評価についても未完成で,今後さらに教材研究や指導方法について完成度を高めるべく努めていきたい。

平成２２年度研究協議会資料≪教育課程≫

学校名	とうきょうがくげいだいがくふぞくこうとうがっこう 東京学芸大学附属高等学校

校 長 名：新田　英雄
所 在 地：東京都世田谷区下馬4-1-5
電話番号：03-3421-5151

新学習指導要領の趣旨を具体化するための指導方法等の工夫改善に関する研究	
研究対象教科等	芸術（書道）

≪研究主題≫

書の伝統と文化を互いに学び合う過程を通して，思考力・判断力・表現力の向上と充実を図る指導方法の工夫改善に関する研究

【研究の要点】

①　書の伝統と文化

書の伝統と文化という視点から，「日本」をキーワードとして，中国の書の受容と日本の書の美の特質を考える。（書道Ⅰ）

書の伝統と文化という視点から，書かれた内容と表現の関係について考える。また，創作作品の制作過程を見直し，素材となる言葉を探すための工夫を行う。（書道Ⅱ）

（取り組みの概要）

書風の異なる複数の古典を，比較，鑑賞して各々の書風の特徴を捉え，その相関関係を考えた。

仮名の散らし書きの美について，行の傾きや行間、行頭や行脚の位置関係を知ることで分析的にその構造を解き明かし、日本の書の美を理解した。

創作作品を制作するに当たっては，「どのように書くか」の前に「何を書くか」を考えることを重視し，自己を見つめ，言葉にする時間を設け，その記述をもとに表現上の工夫を行った。

（成果と課題）

漠然と見ているだけでは気付かないことを、比較したり，分析的に深めていったりする学習活動は成果があったものと考える。肉筆と拓本の書風の捉え方の違いや言葉と表現の関係についてはさらに検討の余地が見られた。

②　思考力・判断力・表現力等の育成

思考力・判断力・表現力等の向上と充実を図る視点から，比較して共通性や相違点を考え，気付いたことを言語化する。（書道Ⅰ）

思考力・判断力・表現力等の向上と充実を図る視点から，複数の古典を比較してその相関関係を捉え，自己表現に結びつける。（書道Ⅱ）

（取り組みの概要）

複数の古典のカードを直線上あるいは座標軸上に分類、配置する際、書風の特徴をいくつかの視点を意識することによって感性を働かせながら，考え、判断し、試行を繰り返した。そして，把握した書風を生かしながら，表現を試みた。

散らし書きされた仮名の行頭を揃え，行の傾きを変えたものと比較して考えたり、補助線を引いたりすることで，反りや歪みを実感した。次に，欠落していた文字をどのように補うかを表現との関連で捉え，気付いたことを言語化して書き留めた。

（成果と課題）

表現の多様性を捉えその相関を考える作業は，その学習過程において思考力・判断力の育成に一定の成果があった。また，書風を捉える学習と，自己の目指す書表現の関連を意識して自己表現の向上に活用していく活動に進めていくことで，思考力・判断力と表現力を密接に結びつけることが可能となった。

③　学び合い

互いに学び合う学習活動を重視するという視点から，学習形態を工夫して，グループ活動や全体でのディスカッションなどを取り入れる。（書道Ⅰ・Ⅱ）

（取り組みの概要）

クラス全体でのディスカッションを通して，古筆の名称を考えたり，書風を捉えたりした。

また，一斉指導や個人学習だけでなく，３～４名のグループを作り、お互いに意見を交換しながら、書風を捉えたり、表現活動の成果を鑑賞しあったりした。また、グループごとに気付いたことを発表し合うことで、学習の共有化と深化を図ることを考えた。

（成果と課題）

全体でのディスカッションは，取り組みに差異が出やすく，教師の積極的な働きかけが不可欠であった。

３～４名でのグループ活動は、全員が参加している実感が持てており、有効と考えた。また、お互いの意見を聞き、自分の考えと比較して考えることができていた。これは，互いの価値観を尊重しあったり，表現の多様性を理解したりすることにもつながり，成果として捉えられる。

Ⅰ　研究指定校の概要

１　学校・地域の特色及び実態

本校は東京学芸大学に附属する全日制普通科の高等学校として，昭和29年に設立された。本校は，心身の発達に応じた普通教育を行うとともに，大学の計画に基づき，他の附属学校との連携を図りつつ，教員養成のための教育実習の実施に当たることを使命としている。「民主的で文化的な国家を建設して，世界の平和と人類の福祉に貢献しようとするわが国の理想を実現できる健康な身体と，高い知性と，豊かな情操とを持ち，清純で気品の高い，大樹のように大きく伸びる，世界性豊かな，人間を育成する。」が教育方針である。

学校規模は，１学年８クラスで，３つある附属中学校出身者（214名），一般の中学校出身者（102名），および帰国生（約19名），その他タイ王国留学生数名からなり，男女同数を原則としている。和気あいあいとした中に，自由闊達な雰囲気があり，生徒は個性豊かで活動的である。全員が４年制大学を希望している。毎年，海外への大学への進学者も数名いる。

２　学校の概要（平成22年4月5日現在）

課程	学科	１年		２年		３年		計	
		学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数
全日制	普通科	8	347	8	358	8	362	24	1067
計		8	347	8	358	8	362	24	1067

教員数　55名（１名）

芸術科は音楽・美術・工芸・書道の４科目で構成されており，1年次2単位，２年次１単位の選択必修科目となっている。書道の選択者はここ何年か100名程度で推移しており，２クラス４展開を実施しているので１講座25名程度となっている。

Ⅱ　研究の内容及び成果等

１　研究主題等

(1) 研究主題

書の伝統と文化を互いに学び合う過程を通して，思考力・判断力・表現力の向上と充実を図る指導方法の工夫改善に関する研究

(2) 研究主題設定の理由

書の学習の多くには，表現領域の分野別に個々の古典をある程度網羅的にこなしていき，そこで培われた技能を援用して創作活動を展開するという一連の姿が見られたと思われる。そこには，古典の技法的理解が不可欠であり，いわゆる毛筆運用力に偏重しているとの指摘がなされてきた。しかし，毛筆運用力の向上だけでは，長い歴史に裏打ちされた本質的な書の理解を意味することはない。

書の伝統と文化についての理解を深めていくためには，「漢字の書」「仮名の書」といった書の分野による内容論的な分類だけにとらわれずに，より広がりや深さを持った単元設定を考え，表現と鑑賞の関連性を高めていく必要がある。更に，書が言葉を書く芸術であることを意識して言葉と表現との関係について考え，自己表現に活用していくことも大切であろう。

また，グループ活動などを通して、作品を比較して気づいたことを述べ合うなど，学び合いと言語活動の充実にも配慮していくことが重要だと考えた。互いの価値観を尊重し，表現の多様性を理解することで，書の学習を通じた思考力・判断力・表現力等のより一層の向上と充実を図ることが可能となる。

以上を踏まえ，研究主題を設定した。

(3) 取組体制

芸術科書道担当教員を中心に，研究部および管理職と連絡を密に取りながら取組を進めていった。また，東京学芸大学書道分野の協力を得て，授業参観や研究協議を適宜行い，指導改善に生かした。更に，静岡大学教育学部教授平形精一先生に指導助言を仰いだ。

(4) ２年間の主な取組

平成21年度	書道Ⅰにおいて単元「日本の伝統と文化を考える」（10時間扱い）を実施した。中国からの書の受容と和様化，散らし書きの美と仮名の線条美，良寛の書とお家流，現代における書の在り方等のテーマを設定し，鑑賞と表現を密接に関連づけながら展開を図った。
平成22年度	平成21年度の成果を踏まえ，書道Ⅱの創作活動に際し，表現するにふさわしい言葉に出会うための方策を，自己を見つめるという視点から展開した。また，古典の書風の理解を複数の古典の相関を探る鑑賞活動を深めることで行い，自己表現に生かしていくことを実践した。

２　研究内容及び具体的な研究活動

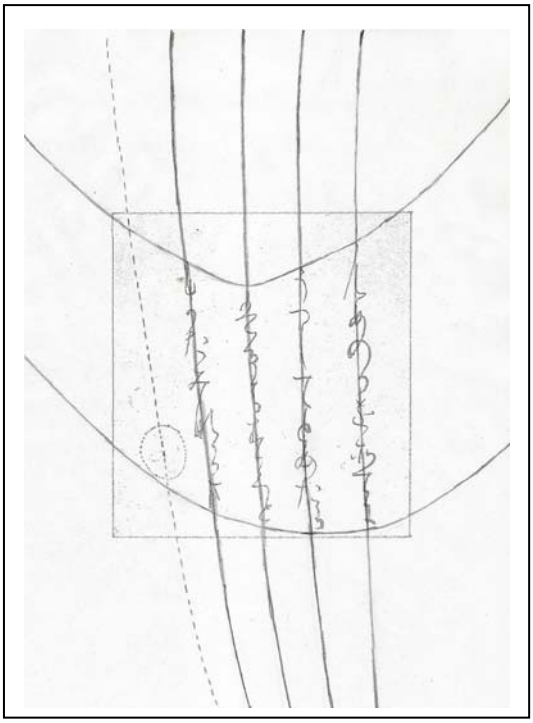
(1) 研究の重点

書の伝統と文化という観点から，「日本」をキーワードとして，中国の書の受容と日本の書の美の特質を考える。

(2) 具体的な取組

①　王羲之，空海，小野道風の書から，共通する数文字をカード化し，各々の書風を考えながら，組に分類した。次に，各々について，その相関関係を探るため，紙面上に距離感を意識して配置した。

②　寸松庵色紙「梅の香を」を題材に，散らし書きの美について考えた。まず、最終行の「志」を削除した資料を見せ，何かが足りないことに気付かせた。次に，行の傾きや行間，行頭や行脚の位置関係を知ることで分析的に散らし書きの構造を解き明かし，日本の書の美を理解した。



(3) 成果と課題

①　書風を把握する学習活動として，分類や相違性の程度を考えることは成果があったものと考える。しかし，王羲之では拓本を反転したもの，空海と小野道風では肉筆を用いたことの影響は課題となる。

②　漠然と見ているだけでは気付かないことを，分析的に深めていく学習活動は成果があったものと考える。この学習が、他の古筆の鑑賞に生かすことができるかが今後の課題と考える。

(1) 研究の重点

思考力・判断力・表現力の向上と充実を図る観点から，比較して共通性や相違点を考え，気付いたことを言語化する。

(2) 具体的な取組

①　王羲之，空海，小野道風の書のカードを分類，配置する際，書風の特徴をいくつかの観点を示すことによって考え，判断し，試行錯誤を繰り返しながら進めていった。次に，把握した特徴を生かして表

現活動を行い，気付いたことを言語化して書き留めた。

② 寸松庵色紙「梅の香を」を用いて，より一層の思考力・判断力の向上を促すため，行頭を揃え，行の傾きをなくしたものと比較して考えたり，補助線を引いたりすることで，反りや歪みを実感した。次に，欠落していた文字をどのように補うかを表現との関連で捉え，気付きを言語化して書き留めた。

(3)成果と課題

① 古典の書風を把握しようとするとき，複数の古典で比較しながら特徴を捉えようとする学習活動は効果的であった。その後の，表現活動においても，特徴を意識した臨書が行われており，学習のまとめとしての記述にも反映されていた。

② 反りや歪みを実感できたことは，日本の書の美の一端を理解できたものと考える。

(1) 研究の重点

互いに学び合う学習活動を重視するという視点から，学習形態を工夫して，グループ活動や全体でのディスカッションなどを取り入れる。

(2)具体的な取組

① ３～４名のグループを作り，お互いに意見を交換しながら，書風を捉え，学習活動を進めていった。また，グループごとに気付いたことを発表し合うことで，学習の共有化を図ることを考えた。

(3)成果と課題

① ３～４名でのグループ活動は，全員が参加している実感が持てており，有効と考えた。また，お互いの意見を聞き，自分の考えと比較して考えることができていた。

(1) 研究の重点

書の伝統と文化という視点から，書かれた内容と表現の関係について考える。また，創作作品の制作過程を見直し，素材となる言葉を探すための工夫を行う。

(2) 具体的な取組

①古典から顔真卿「争坐位稿」を，近現代の書作品から手島右卿「崩壊」を取り上げ，書かれた内容やその背景と表現との関係についてクラス全体で取り組んだ。言葉として「読む」前に，分かること感じられることを優先し，最後に内容と表現の関係について考えた。

②創作作品を制作するに当たっては，「どのように書くか」の前に「何を書くか」を考えるという視点を大きく取り上げ，自己を見つめ，言葉にする時間を設けた。事前学習を経て実施された学習旅行の成果も取り入れるように促した。

③「あなたは自分をどのような人間だと思っていますか？」「あなたが今一番興味を持っているものは何ですか？」「あなたが今までに訪れた場所で最も感銘を受けたのはどこですか？」「あなたが今までに読んだ本の中で最も感銘を受けた本は何ですか？」「あなたの将来の夢は何ですか？」という自分自身の現在，過去，未来と見つめる５つの問いを用意し，まず各々に一言で答え，次いで，その回答に至った理由や具体的な場面等を記述した。

④自身を見つめた記述を踏まえて言葉を考え，表現を進める過程においては，その記述をもとに表現上の工夫を行った。

(3) 考察及び成果と課題

文字（言葉）を正しく整えて書くという書写の概念と体裁よく美しくという意識に支配されがちな生徒にとって，書かれた内容と表現の関係を考えることは，書表現の工夫を進める過程に影響し，成果があったと考える。「何を書くか」という言葉探しの問いが，自分自身を見つめ言葉にすることと同義であることを理解することで，書作品を創作することの意義を深く考えることができたのではないだろうか。自分自身を見つめる記述には，生徒個々の記述量や内容に差異が認められ，その支援の在り方が課題として残ったが，書表現の構想と工夫を推し進める過程においても，自分自身を見つめた記述を振り返ることでその方向性を確認しながら制作を進められたと考える。

(1) 研究の重点

思考力・判断力・表現力の向上と充実を図る視点から，複数の名筆を比較してその相関関係を捉え，自己表現に結びつける。

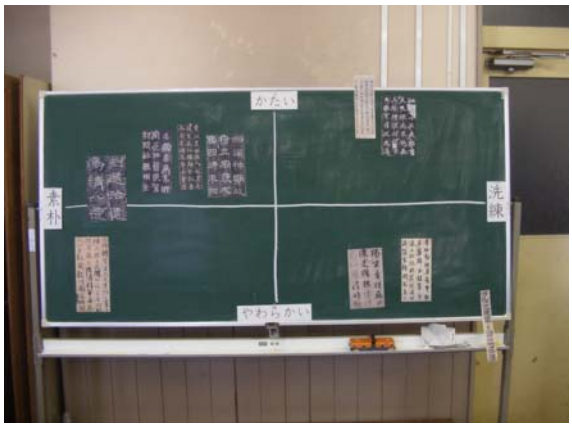
(2) 具体的な取組

①書道Ⅱの教科書に掲載されている漢字の書を10点取り上げ，縦軸を「かたい―やわらかい」，横軸を「洗練―素朴」とした座標平面に，互いの書の書風を捉え，相関関係を意識し，感性を働かせながら置くことを試みた。

②全体のディスカッションやグループ活動で得られた成果と，個人で考え，判断した成果とを比較検討し，自己の判断の再検討を行った。

③座標平面の中で，自分自身が目指す領域にポイントを打ち，その周辺に配置した古典と自己表現との関係について考えるよう促した。

④自己の書表現を進めて行くに当たって，目指す表現に近いと判断した古典が持つ要素を，自己表現に取り入れることを試みるよう働きかけた。



(3) 考察及び成果と課題

表現の多様性を捉えその相関を考える学習は，思考力・判断力の育成に一定の成果があったと考える。しかし，「かたい―やわらかい」「洗練―素朴」という書風を捉える視点は従前の鑑賞学習の自由記述から抽出したものだが，適当であるか否か検討が必要ではないかと思われる。また，座標軸の交差する部分をどう捉えるかも課題である。書風を捉える学習と，自己の目指す書表現の関連を意識して自己表現の向上に活用していく活動は，思考力・判断力の育成と表現力の育成を密接に結びつけることが可能となり，一定の効果があったものと考える。

(1) 研究の重点

互いに学び合う学習活動を重視するという視点から，学習形態を工夫して，グループ活動や全体でのディスカッションなどを取り入れる。

(2) 具体的な取組

①爨宝子碑の書風を捉えるため，クラス全員でディスカッションを行った。まず，自由に印象を捉えた後，視点を示し，どうしてそう感じたのかを発表した。初期の感受であるので，すべてを受け入れることとし，互いの感性を受け入れるよう促した。

②教科書に掲載されている10点の漢字の書の古典のうち爨宝子碑を除く9点の書風を３～４名のグループを作り，１点ずつ割り当て検討した。その結果を黒板に貼り，全員で共有した。

③同様の古典の書風を捉える学習を個人で行い，全体のディスカッションやグループ活動で得た成果と比較・検討をした。

(3) 考察及び成果と課題

一つの古典をクラス全体で鑑賞し，その評価を考えていくことは，お互いのものの見方や考え方を知る機会ともなった。また，個人で行った学習成果とクラスあるいはグループで行った学習成果とを比較･検討し，自己の学習を振り返ることは，互いの価値観を尊重しあったり，表現の多様性を理解したりすることができたと考える。

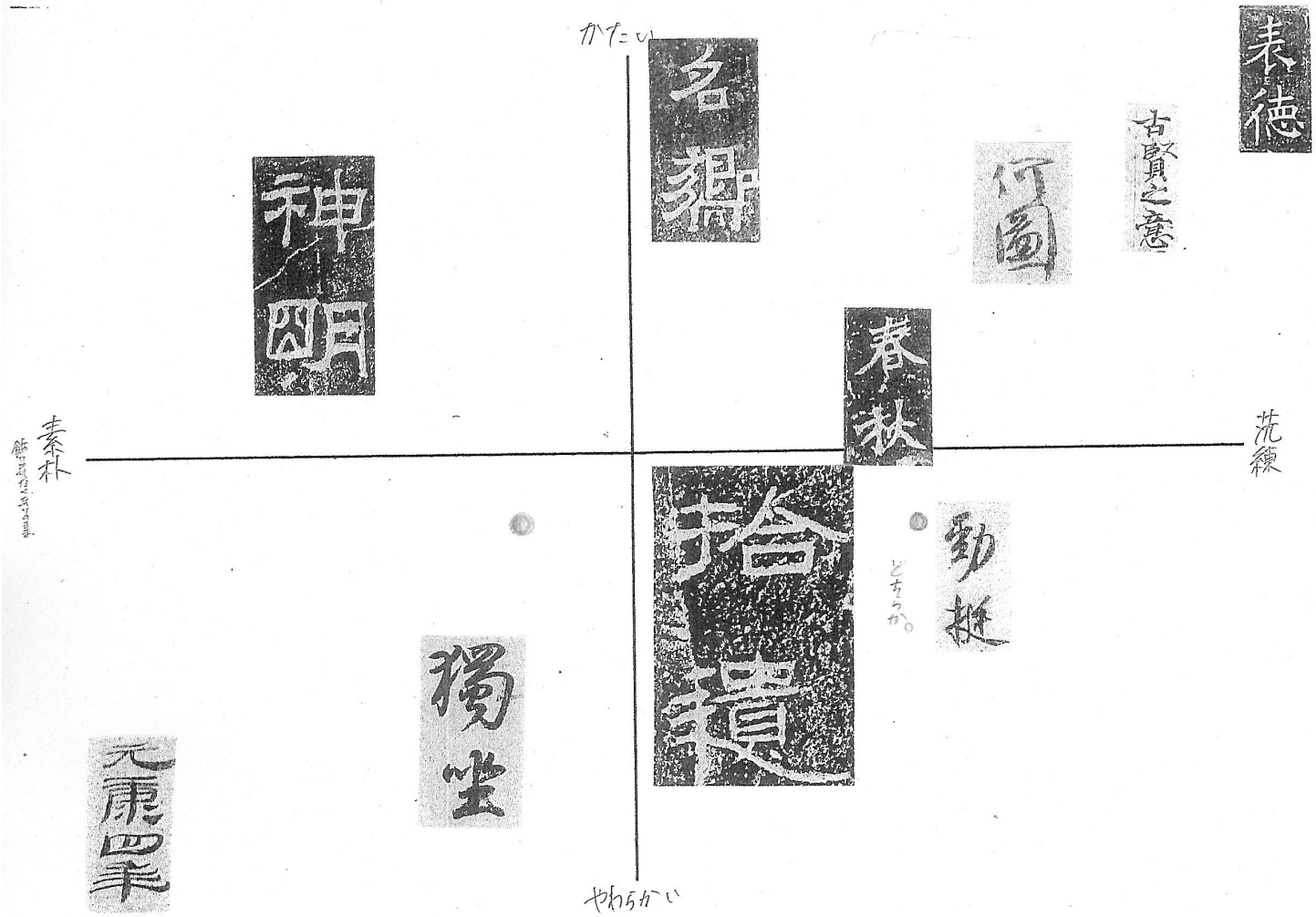
３　研究の成果と課題

書の伝統と文化を考えていくにあたり，主に個々の古典を断続的に学習するというスタイルから，「日本における書の受容と展開」「木簡や帛書によって隷書の成立を考える」「現代における書の諸相」「古典の書風を自己表現に生かす」といった時間的に広がりを持った，あるいは分野をまたがった単元を設定して展開できたことは成果であった。また，思考力・判断力・表現力等の育成を図るために鑑賞学習を中心に組み立てることで，学習形態にも多様性がうまれ，表現と鑑賞の調和の取れた一体的な指導が可能になった。今後推し進めるべき技術偏重に陥らない，的確な書の理解に裏付けされた学習には，より高い鑑賞力の育成が望まれるだろう。

創作展　作品Ⅰ（墨書作品）

言葉と表現を充実させるために

二年　組

▼自分を見つめよう…自分にふさわしい言葉を探そう

あなたは自分をどのような人間だと思っていますか？	あなたが今一番興味を持っているものは何ですか？	あなたが今までに訪れた場所で最も感銘を受けたのはどこですか？	あなたが今までに読んだ本の中で最も感銘を受けた本は何ですか？	あなたの将来の夢は何ですか？
落ち着いている はじけている女子と比べれば、落ち着いた方にいると思う。仲の良い友達といる時は賑やかかもしれないが、どちらかと言うと聞き役の方が多いと思うし、趣味も、書道やデザインなど、芸術的、文化的な傾向が強い。性格も、昔から落ち着いて、冷静と言われることが多い。	将来 予想してもどうにもならないが、気にせずにはいられないもので、将来に直結する大学受験を控えた今、一番関心があると思う。自分で進む道の選択を迫られており、責任は全て自分にあるので、大変だが逆に自由でもあるので、伸び伸びと夢に向かって進みたい。	天龍寺の十方丈庭園 今までに見たことのない美しい光景だった。一面の紅葉と、水面に鏡のように映る木々と、空の青、お寺の白っぽい石庭が調和して、一枚の絵のようだった。その空間全体の広がりが、自然の雄大さを表し、全て心を預けたい気持ちにさせてくれた。	十二番目の天使 自分がどんな辛い状況にあっても、他人を思いやれる優しさを持ち、困難に立ち向かっていこうとする姿勢に感銘を受けた。主人公のティモシーのモットは、「あきらめない、あきらめない、絶対絶対あきらめない」だった。僕は毎日どんどん良くなっている」だった。	第一志望校に合格すること。 今、一番大きな夢はこれだと思う。将来の夢を叶えるには、いくつか段階があるが、次に来る大きなハードルは、大学受験だろう。少しでも夢に近付くためには、その志望校に合格しなければ始まらないので、とりあえず今は、勉強を頑張りたい。